宮崎牛連続日本一

第10回全国和牛能力共進会

小林市は畜産業、特に和牛の生産や肥育が盛んです。身近なところに和牛農家があり、牛肉が食卓にのぼるなど、和牛は私たちの生活に深く関わってきました。しかし、近年では口蹄疫や飼料の高騰などさまざまなことが要因で、和牛農家は厳しい経営を強いられています。それに伴う後継者不足も深刻な状況があります。

そこに差した大きな光。それが、全国和牛能力共進会における宮崎牛連続日本一の知らせでした。みんなが喜んだこの偉業。畜産が基幹産業である小林市で、大きく好転できる機会となったのではないでしょうか。そこで、今回は、郷土の誇りとなった和牛について知り、これからの畜産を考えます。

特集

畜産王国の序章

プロローグ

「バンザーイ」。10月28日、等級結果が発表されるたびに、会場から上がる歓声。誇らしく掲げられた「日本一宮崎牛」ののぼり。

長崎県佐世保市で10月25日から29日の5日間、第10回全国和牛能力共進会が開催され、宮崎県は9部門中5部門で首席を獲得。宮崎牛は、日本一の称号に輝きました。畜産のまち小林市からは、県の代表28頭のうち10頭が出場。出品牛で最も評価が高い牛に送られる内閣総理大臣賞に、小林市の3頭を含む第7区が選ばれるなど、宮崎牛の一大産地として、小林市の畜産技術の高さや、農家の熱心な取り組みの成果を最高の形で証明しました。

上／緊張の審査に臨む５区代表
右／特別賞を受賞した表彰式

第５区（繁殖雌牛群、４頭一組）

優等２席と特別賞（生産局長賞）を受賞

第５区は和牛改良の基盤となる繁殖雌牛集団の斉一化を図り、改良成果の確認と技術の向上を目的とした出品区。成雌牛４頭を１群として出品されます。出品牛は、産肉能力と繁殖能力について、一定以上の水準が求められます。

interview

今村鉄男（いまむらてつお） さん／ 88 うしわかまる

これからも日本一に恥じない牛をつくる

私は、３大会連続の出場。過去の２回はいずれも２席で、今度こそはと２年前から取り組んできました。結果は、２席でしたが、力は出し切れましたし、悔いはありません。私の誇りは、自分のところで生まれた牛を育てあげ、出品してきたこと。今後も日本一に恥じない自分らしい牛をつくるよう頑張ります。

橋満裕治（はしみつゆうじ） さん／ふくさかえ

interviewew

多くの人に支えてもらい感謝

多くの人に支えてもらい、感謝の気持ちでいっぱいです。ＪＡや市の技術員の人に毎日のように早朝、牛の運動や調教などをしてもらいました。また、遠い長崎まで送り出してくれた家族にも感謝です。これからも、購買者に好まれるようないい牛を育てられるよう頑張ります。

interview

下村豊（しもむらゆたか） さん／たかとみ６

経験とともに、多くの仲間を育んだ

自分の牛でありながら、県代表の牛を預かっている気がするほど重責を感じました。さまざまな支援をもらい、本番にはいい状態で臨めたと思います。それだけに、結果には悔しい気持ちもあります。一方で、出場できたことで、多くの仲間ができ、とてもいい経験となりました。

受賞パレードで歓声に応える齋藤さん

第 10 回全国和牛能力共進会
テーマは「感謝・復興・前進」

和牛産地の誇りをかけて、和牛改良の成果を競う、全国和牛能力共進会（以下「全共」）。５年に一度開かれることから「和牛のオリンピック」とも呼ばれます。宮崎県は前回初めて日本一になり、今回の目標は連覇。大会に臨むにあたり掲げたテーマは「感謝・復興・前進」でした。多くの牛が殺処分された口蹄疫から2年。たくさんの支援に対する感謝を胸に口蹄疫からの復興を示し、さらに前へ進むことを誓ったものです。今回の日本一は、全国へ向けた大きなアピールとなりました。

全共までには、西諸の予選や、3か月におよぶ県予選があり、種牛、肉牛両部門合わせて３３１頭の中から県代表が28頭選び抜かれました。そのうち10頭が小林市から出場。たくさんの期待と注目を浴び、連覇というプレッシャーの中で、快挙を成し遂げました。

そこで、日本一に貢献した9人の和牛農家の声を紹介します。

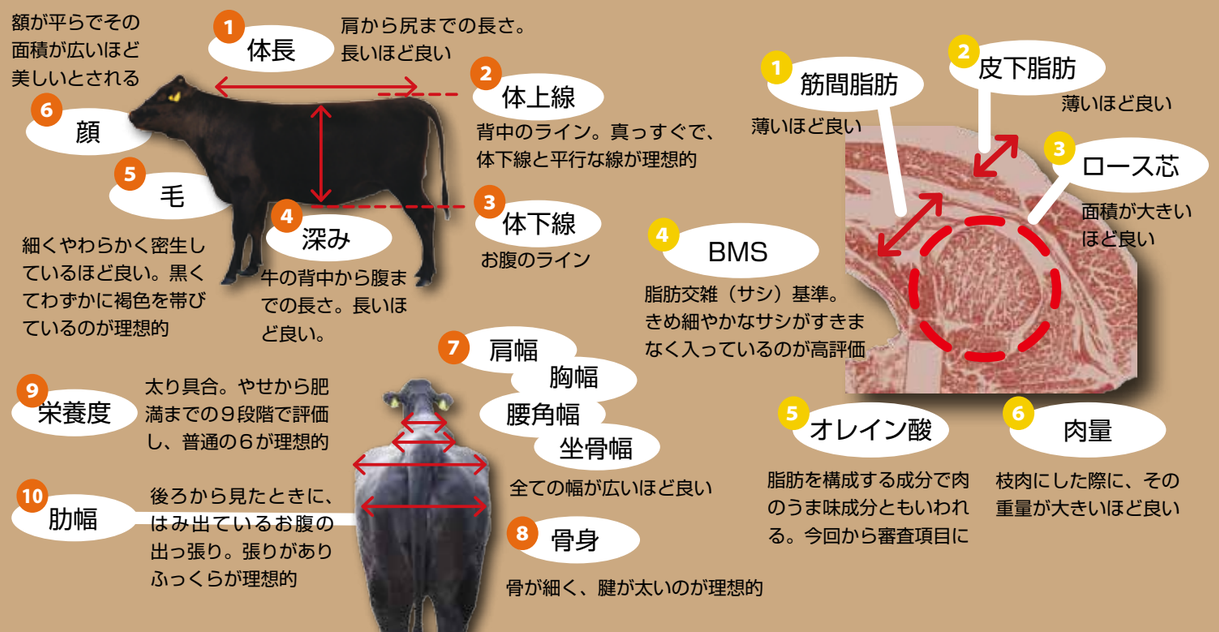
interview

公益社団法人
全国和牛登録協会
宮崎県支部
長友明博（ながともあきひろ） 業務部長

レベルの高い県内の競争が原動力。代表の座を競った農家や関係者のおかげ

全ての代表牛が最高の状態で長崎大会に出品できたことに満足しています。このことは、出品者や関係スタッフの尽力の賜物です。さらに、県代表を目指して高いレベルで県内の競争ができたことも日本一の大きな原動力となりました。代表の座を競った農家の皆さんや、サポートした関係者の皆さんに感謝します。

Pick up　全国和牛能力共進会　牛と肉の良さはこうやって決まる！



肉牛の部の結果を確認する多くの関係者

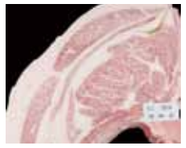
第８区（若雄後代検定牛群、３頭一組）

肥育農家３人が優等５席に入選

次の世代を担う能力の高い種雄牛の発掘と、現場後代検定の普及促進を狙った出品区。去勢肥育牛３頭を一群として出品。

interview

中窪勝彦（なかくぼかつひこ） さん／貴花

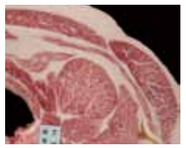


この経験を生かし、日本一に臨みたい

前回日本一というプレッシャーがあり、連覇に貢献できるか不安でしたが、優等を獲得できたので良かったと思います。今後の目標は日本一。経営は厳しいですが、この経験を生かしていきたいです。

interview

（有）馬場牧場　馬場幸成（ばばこうせい） さん／福助



他県より恵まれた多くのサポートに感謝

市をあげてサポートしてもらいありがたいという気持ちです。そういった点で、他の県より恵まれていると感じました。結果、優等に入り良かったです。

interview

平野文宏（ひらのふみひろ） さん／龍福

育んだ人脈と経験を生かし上を目指したい

県代表の候補に選ばれて全共に出たいという思いが強くなり、出場できて良かったです。県内の畜産のトップレベルの人たちとも知り合えました。この経験を生かし、さらに上を目指したいと思います。

Pick up

日本一に挑んだ出品者を支えた男たち

長崎県での全共会場で、人目もはばからず両手を掲げ、涙を流し喜びを表現する男たち。彼らは、ＪＡや市の畜産技術員などの関係者だ。日本一となることを信じ、農家をサポートし続けてきた。

連覇が至上命題だった今回、ＪＡや市の技術員は、代表の候補牛がいる農家をそれぞれ担当。５月から毎朝５時30分に畜舎を訪れ、牛の運動や調教、洗いなどを手伝いながら、きめ細やかな指導を行ってきた。５区で出場した下村豊さんは「自分が大変なときも、毎朝必ず来て、運動などを率先してやってくれた。同じ目標に向かってやれていたので、信頼関係も築けた」と話す。第７区の中別府秀雪さんも「この結果は自分一人のものではない。首席が決まったときは、自分のことのように涙を流して喜んでくれた。牛をここまで仕上げるのは一人ではとてもできなかった」と感謝の言葉を口にする。

こういった市やＪＡの取り組みは10年前の岐阜全共から行われている。そして前回の日本一、今回の連覇とその成果は着実に出ている。「宮崎牛を、小林市の牛を日本一に」という彼らの熱意がなければ、今回の快挙はなかったかもしれない。

下村さんから口癖の言葉「毎日おつかれ、ごくろうさん」と声をかけられると、毎日のように通った市職員の迫間杉太郎（さこますぎたろう）さんは満面の笑みを浮かべて応える

第７区（総合評価群、７頭１組）

優等首席、斉一性賞と大会中抜群の評価で内閣総理大臣賞獲得

上／首席を獲り、応援席へ「１番」を合図する第７区代表の４人
左／最高の結果に互いをねぎらい祝福の握手を交わす

第７区は種牛能力と産肉能力を総合評価する出品区です。地域の改良の中核を担う種雄牛の産子を展示し、各地区の改良成果を確認。種牛群と肉牛群合わせた７頭で１群として出品されます。

interview

齋藤國章（さいとうくにあき） さん／こはね２

和牛人生の集大成に最高賞を獲得し感動

今回の全共は、自分の和牛人生の集大成でした。結果が発表された時は、期待に応えられた安堵感とともに喜びがあふれました。今は、夢が叶い、最高の賞までもらって達成感でいっぱい。これからは、小林市の基幹産業である畜産を担う若い人たちを応援したいです。

interview

中別府秀雪（なかべっぷひでゆき） さん／ももか

多くの拍手に強く持った感謝の気持ち

首席に決まり、周りを見渡したとき、宮崎県関係者ではない人まで拍手を送っているのが目に入りました。口蹄疫からの復興を喜んでくれているようで、感謝の気持ちが強くなり、頭を下げ続けたのを思い出します。長崎に行っている間、牛を世話してくれた家族に感謝です。

interview

森田直也（もりたなおや） さん／まりあ

多くの人が喜んでくれて嬉しかった

出場するまでの半年間、お世話になった人たちにありがとうと伝えたいです。初めての出場で２頭出品し、特に２区では緊張しました。しかし、２席で悔しかった。一方で、内閣総理大臣賞の受賞が決まったときは、多くの人が自分のことのように喜んでくれて、嬉しかったです。

一流の流儀

今回の全共に２頭を出品し、第２区は優等２席、第７区では首席を獲得。近年の共進会で抜群の実績を誇る一流の牛飼いを追った。

和牛界若手の旗頭　森田直也さん

牛が大好きな少年は、やがて一流の牛飼いになった

真方在住の森田直也さんは、52頭の牛を飼う和牛繁殖農家。今回の全共に2頭の出品を果たしました。昨年は県のグランドチャンピオンを獲得するなど抜群の実績を誇ります。そして、今回の全共では、種牛4頭が選ばれる第7区で内閣総理大臣賞を受賞し日本一となりました。

紫色のメダルに憧れて

森田さんは、幼い頃から牛の世話を手伝うなど、牛が大好き。小規模ながら情熱をかけて牛を育てる祖父の背中を見て育ちました。負けず嫌いの祖父は、品評会でなかなか勝てない中で優等を獲得すると、地域の人を集めてお祝いをしていたそうです。森田さんは、子どもながらに、優等になった牛の首に輝く紫色のメダルに憧れていました。小学5年生の頃、和牛農家を営む親戚の家に行ったとき、一頭の牛に魅了されます。その牛が次のセリに出ることを聞き、祖父に頼み込んで購入してもらいました。それ以降、欠かさず世話や運動を続け品評会に出品。それがなんと優等賞を獲得しました。その時のうれしさは忘れられないものだったそうです。

祖父譲りの負けん気

26歳で祖父から継ぎ、繁殖農家となった森田さん。「いい牛をつくらないといい値で買ってもらえない。品評会や共進会は自分の名を売る場」と考えています。早速、その年から品評会に出品も結果は2等。思わぬ惨敗に「頑張っても、首席でないと」と祖父譲りの負けん気が、森田さんを駆り立てました。それ以来、牛を買う際の選び方を変えたそうです。その基準を聴くと「自分のえさのやり方に合った牛。将来、品のある牛になるだろうと予想できる。でも最後は自分の感覚」と教えてくれました。森田さんの牛へのこだわりは「品」。体の美しさ、毛並や形など、自分が理想とする牛に育てようと情熱を傾けています。

第２区で優等２席を獲得した「みゆき」と引き手を務めた直也さんの弟正明（まさあき）さん

心配が尽きなかった口蹄疫

そうして牛を育ててきた森田さんですが、口蹄疫について聴くとその表情が曇ります。「あの時は競りがなく、収入がない中で、餌は与えないといけない。経営的にとても苦しい状況だった」と振り返ります。そして、冷や汗をかき、夜も眠れなかった日々のことを話してくれました。

口蹄疫発生前の県内のセリで、森田さんは一頭の牛を購入。その後、口蹄疫発生のニュースに大変なことが起きたと思ったそうです。しかし、もっと大変なことが分かります。森田さんが先日購入した牛の生産地で口蹄疫が発生。「あのときは本当に慌てました」。毎日その牛を観察します。外出もできず、精神的に参る日々。また、昼夜を問わず消毒作業を行う多くの人に感謝の気持ちと、畜産農家のために、いろんな人に迷惑をかけたのではという思いが交錯。心配していた牛は発症もなく杞憂に終わりましたが、その後の子牛の価格など、心配は尽きなかったそうです。

日本一への挑戦

森田さんは、全共を見据え、今年2月のセリで候補となる牛を購入。自分の目を信じたものを競り落としました。それから約半年間、毎朝5時30分から牛を運動させ、人間用のシャンプーで洗いブラッシング。JAや市の技術員の手伝いをもらいながら続けました。

牛の性格は個体によってさまざま。繊細で臆病な生き物です。人や物音には敏感で、何かの拍子に飛び上がってけがをしたり、環境が変わると、体調を崩すこともそこで、森田さんは人に慣れさせるため、時間があれば、牛の寝食に付き添うそうです。言葉をかけるでもなく、じっと見つめます。そうして堂々とした牛に育て上げました。その結果、全共でも長距離移動、環境の変化と人の多さに動じることなく、平然と餌を食べていたといいます。

そして迎えた全共本番。自身も初めての晴れ舞台で、一頭で出場した第2区で優等2席、団体の第7区で日本一に輝きました。ここに来るまでに手伝い共に戦ってくれた仲間が、涙を流して喜んでいる顔が見えます。満面の笑みで拍手を送る応援団が見えます。森田さんは、少し照れくさそうに下を向きながら、期待に応えられた安堵感と、支えてくれた人たちへの感謝の思いをかみしめました。

全日程を終えた29日、小林市に凱旋。時間は夜の11時過ぎでした。代表団を乗せたバスが小林家畜市場に入ります。次の瞬間、快挙を祝おうと集まった多くの人が見えました。「たくさん出迎えで、みんなに期待されていたことを改めて実感しました」と当時の感動を語ります。

内閣総理大臣賞受賞が決定し、大歓声の中パレードをする森田さん

次の目標へ向かって

全共が終わり、いつも通り牛舎で仕事に精を出す森田さん。「今回の結果で、宮崎牛を買いたいという人が増えてセリ値に反映され、お世話になっている人への恩返しになれば」と、今後に期待を寄せます。そして「次は単品で出場できる2区、3区で日本一に挑戦したい」と抱負。牛に向ける優しく鋭い眼差しは、5年後を見据えています。

1消毒ポイントでは行きかう車に消毒液を吹きかける2ラジコンヘリで消毒薬を噴霧3交通量の多い道路では消毒マットを設置4通行止めになった道5消毒に協力を呼びかける看板6夜を徹して消毒は行われた

みんなで守った誇り

口蹄疫侵入を阻止せよ

小林市の周辺自治体で次々と発生した口蹄疫。絶体絶命の状況の中、市民一丸となった防疫が展開された。

平成22年4月に発生した口蹄疫。またたく間に感染は広がり、小林市の周囲でも感染を確認。一部地域が移動制限区域にかかるなど、いつ口蹄疫のウイルスが侵入してもおかしくない状況に置かれました。それでも、どうにか小林市を守ろうと昼夜を問わず行われた防疫作業は、行政やJAをはじめとする関係機関だけではなく、ボランティアも参加。また、イベントの中止、店舗など多くの人が行き交う施設での消毒マットの設置、車への消毒など、市民一丸となって防疫に取り組みました。その結果、市内での発生はなく、畜産のまち小林市は守られたのです。

伝染病から家畜を守れ！小林市の消毒サービス

口蹄疫での多大な犠牲と引き換えに私たちは防疫の重要性を学びました。しかし、それを風化させることなく防疫意識を高く持ち続けることは難しいものです。

義援金を活用し巡回消毒

そこで、牛農家を対象に、巡回消毒サービスを行っています。消毒の有用性を実感してもらい、定期的な消毒を習慣にしてもらうのが狙いです。また、消毒は、口蹄疫だけではなく、他の伝染病や病原菌にも有効なので、畜舎環境が改善し、病気が減ることで牛の生産性の向上も期待されます。

この事業にかかる費用は、全国から寄せられた義援金が充てられています。今回の全共における県のテーマは「感謝・復興・前進」。全国からの支援を、防疫に使い、畜産の復興と前進に役立てようと、取り組みが決まりました。

消毒サービスは、西諸地域酪農ヘルパー利用組合に委託されました。その理由は、牛の扱いに慣れていることや、口蹄疫が発生した期間に、消毒ポイントでの活動実績があること。平成23年度は254戸、今年度も9月までに635戸で実施しました。

今後は、各農家の防疫に対する取り組みの確認を行いながら、巡回消毒業務のさらなる普及を図っていきます。

右・下／畜舎に石灰や薬剤を散布し、消毒を行う様子

これからも定期的に頼みたい

interview

消毒サービスを体験した
森岡一男（もりおかかずお）さん

口蹄疫があったこともあり、消毒には気を付けていますが、畜舎全体を消毒することは、一人ではとてもできません。畜舎の衛生も保たれますし、今回の消毒サービスを受けてとても良かったと思います。これからも定期的に頼みたいと思いました。

Pick up

口蹄疫で定期演奏会を中止

interview

小林市民吹奏楽団

吉田穂摘（よしだほづみ）さん　森山拓郎（もりやまたくろう）さん

私たちは、練習の成果を披露する場として、毎年6月に定期演奏会を開催します。2年前の口蹄疫のときは、合同練習を自粛し、演奏会を中止しました。感染を拡大させず、一刻も早い終息に貢献できればと、みんなで決めました。ですから、宮崎牛が日本一となったことは、自分のことのように嬉しかったですし、誇りに思います。

2年前の口蹄疫防疫作業にボランティアで参加

interview

12の建設業者で構成するボランティア団体　十五日会（じゅうごにちかい）

（左から）会計山中浩史（やまなかひろし）さん、入佐市男（いりさいちお）会長、川野篤宏（かわのあつひろ）副会長

口蹄疫の発生を知った時、大変なことが起こったと思いました。そして、小林市の畜産のことが心配になり、何とか力になれないかと、消毒作業に参加することを決めました。所属するみんなが快く協力してくれ、毎日各社一人ずつ出てくれました。いろいろなことがありましたが、宮崎牛が日本一になって、農家の皆さんの頑張りの凄さを感じましたし、嬉しかったです。今後も、ちょっとした消毒などにも協力できたらと思います。

日本一。その後・・・

11月12日と13日、宮崎牛が連続日本一を獲得した後、小林地域家畜市場では初めての子牛競り市が開催された。競り会場は、出品する農家と県内外から訪れた購買者などが集まり、熱気が溢れていた。

1

購買者が鋭い視線を送る先に、ずらりと並んだ子牛が競り会場に次々と引かれて入ってきます。すると、電光掲示板に表示された競り値が瞬く間に上昇。価格が決まると退場し、次の牛が入場します。

この2日間の競りに出品された子牛は、西諸地域から全部で1211頭。注目された平均価格は、雌が39万1588円、去勢が46万9473円で、全体平均が43万1758円。前回と比較すると2万8098円高くなりました。出品した子牛生産農家にとっては、宮崎牛日本一の好影響が出た結果となりました。

県内7市場を回り、農家に代わって牛を購入しているJA全農の井垣辰夫(いがきたつお)さんは「宮崎牛の購買者のうちおよそ6割は県外。宮崎県は、和牛への熱意と技術が高く、肉質を重視して改良を重ねてきた。その結果、県外の購買者は、ここでしか買えない牛を求めている」と宮崎牛を分析。また、「小林地域家畜市場に出る牛は、日齢に応じた発育が県内で一番そろっている。平均してレベルが高い」と西諸の牛を評価してくれました。

今回行われた子牛競りで、取引された金額は総額で約5億2千万円。非常に大きな金額が動くだけに、地域経済に与える影響は大きく、今後の子牛価格の動向が注目されます。

1 立ち見までいっぱいとなった競り会場 2 競りの順番を待つ子牛 3 子牛の価格が表示される電光掲示板に注目集まる

2

3

interview

佐賀県で約2000頭を肥育する有限会社　中村牧場代表取締役社長 中村俊六(なかむらしゅんろく)さん

肉質が良い市場であり、「また来たい」と思える地域

私は宮崎県で子牛競り市が開催されるたびに訪れます。一つの競りで購入する頭数は約50頭から100頭。私が宮崎県で子牛を買う理由は、肉質の良さです。これは、他県にはないほど、和牛に対して熱心に取り組んだ成果だと思います。このことは、農家の姿勢からも感じますし、行政も一生懸命だと感じます。2年前には口蹄疫がありましたが、私はきっと復活すると信じていました。30年来宮崎に通っているので、さまざまな人と知り合え、また来たいと思える地域です。

Pick up

県肉畜共進会で薗田誠(そのだまこと)さんがグランドチャンピオン

11月6日、牛と豚の枝肉成績を競う第8回県肉畜共進会があり、肉牛枝肉の部で薗田誠さんがグランドチャンピオンに輝きました。110頭が出品された同部は、肉質等級の最高ランク5等級の割合が62.7パーセントと高い数値を占める大接戦。薗田さんは「私も長崎まで応援に行ったが、良い影響を受けられたと思う。支えてくれた家族に感謝。今後は、出す肉全てがA5等級を出せるよう頑張りたい」と喜びを語りました。

interview

畜連に聴く今後の畜産

時の利、地の利、人の利がある西諸 今後は全ての和牛のレベル向上を

―今回の全共を振り返って

宮崎県、特に西諸が全共で素晴らしい成績をあげた背景には、「時の利、地の利、人の利」があったことだと思います。

時の利とは、優秀な種牛がいたこと。口蹄疫の影響が心配されましたが、美穂国(みほのくに)、勝平正(かつひらまさ)や天奨藤(てんしょうふじ)などの種牛が素晴らしい結果を出しました。地の利とは、地域の土壌が火山灰質で飼料作物を作る畑作に向いており、畜産が発展したことです。人の利とは、団結した人の取り組みがあったこと。宮崎牛の連続日本一は、農家はもちろん行政やJAなど県内の関係機関が一体となった取り組みの成果です。具体的には、全共の大舞台でも動じず普段通りに力が発揮できる人材の育成、その人材が携わる代表牛づくり、その応援体制です。そこで、繁殖農家へは、導入後から共進会当日まで主に若い技術員が派遣され、毎日指導や意見交換を実施。肥育農家へは、枝肉成績の高い農家に、西諸の優秀な母牛からの指定交配産子を委ねて、高い技術力で育ててもらいました。今回の経験を積むことで、彼らと農家とのつながりを強くし、農家の思いを感じ、これからの畜産技術の中心として、とても成長できたのではないかと思います。

interview

西諸県郡市畜産販売農業協同組合連合会 参事　谷之木信弘(たにのきのぶひろ)さん

―全共後の競りで子牛価格が上がったことについて

最近、3等級と4等級の枝肉価格が上がっていることが要因だと考えます。また、全共は大きなアピールとなりました。肉質の良さが証明され、宮崎牛の知名度は一層高まりました。今後も、この効果が続くといいと思います。

―今後の課題は

西諸地域には約2万頭の母牛が飼養されています。これをいかに維持していくかが課題です。しかし、農家の高齢化や後継者不足が深刻化。県内をはじめ全国から需要がある中で、この数を維持しないと競り市に出る子牛が減少。市場としての魅力を減らしてしまい、安定した価格が望めなくなる可能性があります。ですから、この課題解決は急務といえます。

全共に出場したのは西諸から12頭ですが、管内2万頭のレベルを上げ、質の高い牛を作ることが大切。そのためには、質が高くばらつきの少ない種牛を作る必要があり、現在、関係機関で西諸産の種雄牛を造る取り組みを進めています。

今回の結果は、西諸の和牛を売り込むチャンス。消費拡大へ行政とJAなどがまとまって考えていく必要があると考えています。

interview

小林市長　肥後正弘（ひごまさひろ）

日本一の和牛を生かしたまちづくり、
課題、取り組み、展望とは

interview

日本一はこれまでの取り組みの果実 どう生かすかは私たちに託された

市長に聴く

今回の全共を振り返って

まずは、快挙を成し遂げてくれた出品者の皆さんに感謝申し上げます。そして、それを支えた関係者の皆さんにも感謝します。長崎の会場は、小林からの大応援団の熱気もあり、すばらしい雰囲気でした。

地域の誇りを守った

2年前の口蹄疫では、市をあげて防疫に取り組み、小林市での発生はありませんでした。今後も、地域の誇りである畜産を守っていくために、積極的に取り組んでいく必要があると感じています。

畜産のまち小林のこれからは私たちに託された

今回の快挙までには、多くの先人たちの苦労と努力がありました。この取り組みが、今回実を結んだものだと考えています。そして、今後、この果実を生かしていくことが、私たちの役割だと思っています。

肉を消費地に売り込む必要

今回の和牛日本一は、口蹄疫や新燃岳の噴火で冷え切った地域経済を活性化する大きなチャンスです。

全共後の子牛競りでは、価格が上がり、効果があったと思います。一方で、肥育農家は、枝肉価格が上がっていかないと経営的にも苦しいです。そのためには消費拡大が重要。これからは大消費地に、売り込む方法を考える必要があります。マーケティングを研究し、加工により付加価値の創造するなど、さまざまな取り組みを模索します。

協働で小林産の農畜産物を活性化したい

全共で宮崎牛の知名度は高まる一方です。その一大産地である小林市には、たくさんの安心で安全な農畜産物があります。11月23日の農畜産まつりでは、宮崎牛をはじめ、さまざまな農畜産物の振る舞いや格安販売を行いました。身近な魅力を味わっていただけたと思います。

そこで、和牛と合わせて、農畜産物もアピールできないかと思っています。料理のレシピや加工品の製品化などが考えられます。それらを協働により、アイディアを出し合って取り組めば、より良い方策を展開できると考えています。

触れて、食べて笑顔になれる
身近な和牛は日本一
みんなで考え、つくり、育てたい
畜産王国、小林市のこれからを

宮崎牛の連続日本一には、出品を競った農家やそれを支えた関係者の熱意と努力の成果であることが分かりました。

和牛の産地に暮らす私たちは、和牛に触れ、その温かさに驚いたり、宮崎牛のとろけるようなおいしさで笑顔になったことがあるはずです。私たちにとって、和牛は身近な家畜。2年前の口蹄疫から、多くの関係者が昼夜を問わず消毒を行い、私たちが協力したのは、市の宝である畜産を守りたかったから。だからこそ、今回の喜びを多くの人が共有できたのではないでしょうか。

史上初の連覇が付加価値となり、宮崎牛が注目を集めています。これは、宮崎牛を育てる農家の努力はもちろん、口蹄疫での私たちの協力があったからにほかなりません。この宮崎牛日本一というものをどう活用できるか。みんなで共に考えていきましょう。畜産王国、小林市のこれからを。